

## ナランホ遺跡の 建造物配置に関する研究

伊 藤 淳

今回のNaranjoの建造物配置の研究ということで、マヤ遺跡の一つNaranjoで見ることのできる建物の配置計画を観察していき、そしてそれらがどのような方法で行われ、どのような意味を持っているのかということを検証していった。

これに関して見ていくためには、オリエンテーションという現象が重要な要素となっていることが分かったので、Naranjo以外の遺跡でどのような要因があり、実際にどう配置されているのかを、参考とするために見ていくことにした。ここでオリエンテーションとは、建物の軸を特定の方向へ、目的を持って向けることである。

まず、このオリエンテーションについて見る前に、幾何学的な配置というものについて見ていった。マヤの遺跡の配置には、ほぼ正確な三角形や同心円状のアーチを形成したり、直角や平行を意識するといった幾何学的な要因が見られる。それは建物間で行われたり、建造物自体にも観察することができる。これに関して見るためにまずはその正確性というものを検証し、この配置の正当性を示すことにした。そしてその後、この配置が見られる遺跡のいくつかを見ていき、上記のような複数の建物で構成される三角形や同心円のアーチといった配置の実例を挙げていった。

そのようにして遺跡に見られる幾何学的な配置を見ていった後、次にオリエンテーションの検証へと続けた。これに関してはいくつかの要因が挙げられている。主なものとしてAveni and Hartung (1986) で以下のようなもの

が挙げられている。

(1) 谷や丘、川や海岸線などの地形、(2) 卓上風<sup>り</sup>や気温、湿度などの気候、(3) 信仰や宗教に基づく宗教、(4) 農業的な慣習に役立ったであろう天文学、(5) 多くのマヤ建築が、現在のユタカンにおける偏角 ( $6^{\circ} - 8^{\circ}$  E of N<sup>2)</sup>) に沿って配置されたと指摘された (Fuson 1969) 磁器学。しかしこれに関して大半の文化では一般的でなく、マヤにおいてもその因果関係が偶然であるという議論がされている (Aveni 1975)、(6) 防御的な配置や交易ルート確立といった社会的問題、そして (7) 単に元からある配置計画に従い、新しく建てられた建造物は本来の目的を失っているという偶然と任意性といったものである。しかしこうして分類はされても、すべての配置計画がこれらの一つに当てはまるわけではない。ほとんどの配置要因はこれらの分類の複数のもを含んで計画されているのである。

そしてこういった要因を念頭に置きながら、実際にいくつかの遺跡で行われている配置を見ていった。そしてそこでは天体への注視というものがあったことが分かった。さらにそれにより農業や宗教における重要な日の決定にも役立っていたことも判明した。

このようにしてこれまで見てきたことをもとに、今回扱う Naranjo ではどのような要因のもとに建造物の配置が行われていたのかを見ていくことになった。

今回の検証により、Group B ではまず Str. B-18 を中心とした配置計画を考えて見ていこうとした。それはこの建物を取り囲むような周囲の建物の配置を見てのことであったが、ここで2つの三角形という幾何学的な配置要素を発見することができた。

これらはそれぞれ特定3つの石碑を結んでできるもので、1つは Str. B-18 全体をすっぽりとその中に含んでしまうもの、そしてもう1つは神聖文字階段の横にある Stela 9 を頂点とするものであり、これにより Str. B-18 の重要性が示されるものであると考えた。この Str. B-18 の重要性については、ほかにも

戸口を西へむけるという配置や、西の広場でのピットの床面の多さなどからこれを宗教的な意味をもつ建物であるとしてこれを補強した。

Group Cでは、その建物配置がマヤに存在する世界創造神話と関係付けられ、それを再演しようとしていたことを述べた。またここでも三角形による配置を見ることができた。それはStela35が特定の建物に沿って設置されているように見えないということや、Str.B-21がGroup Bで見られた三角形に背く形で配置されているといった、それぞれの配置に見られる不自然さがその発見の発端であった。

このほかに2つの直線も存在していた。1つはStela 35を用いたほぼ正確な東西線で、もう1つは中庭にあるマーカースを通過し、中庭の西の境界線と直行する線である。これらの2つの線はそれぞれGroup Bにある石碑へとつながるものであった。このことからこの直線が2つのグループを関係付けるものかとも考えたが、そもそもこのグループ分けは考古学者が便宜上行ったもので、当時の人々にそのような概念があったかどうかは分からない。もともと距離自体それほど離れたものではないので、ここでそういった考えはなかったであろう。

さいごに天体への重視の可能性について考えた。これは主に太陽とオリオン座への重視を見てきた。太陽の重視はほぼ正確な東西線の存在や、Group CにあるStr. C-1, 2, 3, 4の構造を見ることで、春分や秋分への関心を持っていたであろうことが分かった。このGroup BのStela9を基準とした3つの線に関して、春分秋分や夏至冬至の日の出位置に相当する方向へ向けられているという事実は存在するが、それが、特に夏至冬至において実際に観察されていたのかどうかは確信できず疑問が残った。

オリオン座の重視に関する可能性については少し複雑な作業になってしまった。このオリオン座はマヤの世界創造神話と密接なかわりを持つ星座で、その分かりやすい形からも重視の対象となりやすかったであろう。そして、この星座内で形成される三角形を実際の地上の配置で再演しようと試みたの

であろうと考え、それが実際に見られることを見てきた。そしてGroup Cの中庭にあるマーカーを通過する直線の東の先に、オリオンの3つ星が昇ってくる位置が存在しているということから、オリオン座の観察があったであろうと結論付けた。しかし本論でも述べたように、ここまで正確な配置を実際の観察に基づいて行っていたのかどうかには疑問が残っている。

これらのようにマヤでの遺跡における三角形配置という配置計画は、その創造神話に登場する3つの石によるところが大きいのであろう。実際、他の遺跡で、神話に関する概念と非常に密接に関係するような構造を持った建物は存在しているのである。

Naranjoにおける様々な配置計画を見てきたが、建物の傾けられた軸自体が何らかの意味を持つということは見られなかった。ではこの傾きは何を意味したのか、それはここで判明させることができなかった。このことに関しては更なる研究やデータ収集が必要となるであろう。

今回は建物や石碑の年代は考慮に入れずに考えてきた。そのために、これから調査が進み、それらがはっきりしてくると、今回述べてきた結果もいくつかは訂正が必要になってくるであろう。また、天体イベントに関する議論は、大半が出版されたデータに頼ったものであり、実際に自身で観察を行ったわけではないということも問題として挙げられる。つまりこれからの調査の進展により、今回の結果は変わる可能性がある。そのため、この正当性を推し進めることは避けたい。また今回使用した地図にあるグループ以外にもまだ建造物群が存在しているようで、それとの関わりもでてくるかもしれない。しかし、まだ情報が不十分であることのNaranjoにおいて、今回の議論が少しでも解決の手助けとなることを信じている。

注

1. ある地域、またある季節に常に吹く風
2. East of North、北から東へ傾いていることを表す。